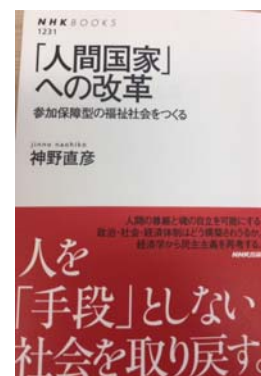


「人間国家」への改革

表題と写真は、2015年6月刊行の神野直彦著「NHK ブックス」だ。副題は「参加保障型の福祉社会をつくる」である。

表紙裏から一グローバル化によって進んだ「市場拡大」と「政府縮小」の潮流は、世界中に二つの過剰と二つの環境破壊をもたらした。過剰な豊かさと過剰な貧困、自然環境の破壊と人的環境の破壊である。一方国内では、地方消滅、社会保障崩壊、民主主義の危機が忍び寄る。政治が市場を制御し、財政を有効に機能させ、すべての人間の参加が保障される社会はどう実現されるのか。人間を「手段」として見る「事業国家」から、人間の「生」を最上位に位置づける「人間国家」へ。財政学の大家による提言の書。



いろいろ紹介したいが、「おわりに」の一部から一「目の敵」という言葉がある。「目の敵」とは何かにつけて憎み、敵視することを意味している。私は自分の眼を「目の敵」としてきたような気がする。自分の学問が未熟なのは、書物すら碌に読めない役立たずの眼のせいだとして、眼を憎み、敵視してきたからである。私は42歳のときに、網膜剥離を患った。手遅れ状態だった。眼を摘出し、シリコンのリングで巻いて埋め戻している。-----私は来年で齢70を迎える。私の眼は良く頑張ってくれたのだ。「目の敵」にするのではなく、良くやってくれたと褒めてやりたい。もう充分だ。後はゆっくり休んで欲しい。心から感謝を込めて、私は眼にそう告げたい。(ここを紹介したのは、同じ網膜を患い、2度の入院・手術を経験したので、身につまされるからだ。「もうまくに、してほしい」という心境だが、私もいつか眼に感謝の言葉を伝えたい。)

もう一箇所として、終章の終わりから一市場が社会と自然の自己再生力を破壊しようとするとき、政治の使命は市場を制御することである。もちろん、それには民主主義が有効に機能している必要がある。市場が凱歌を掲げても、「シジフォスの神話」のように敗者の頑張り、市場を民主主義の制御のもとに置く努力を重ねることには十分な理由がある。それは人類の存亡が懸かっているからである。逆風に向かって、「人間国家」への道を希望と楽観主義を携えて歩み始めなければならない。ひとたび失った人間の世界を取り戻す「懐かしい未来」と、新しい人間の「生きる」という意味を求めて一。

(2016年1月24日)